

消え去ってしまうのであろうか。

4 親子の自然な感情

孝行は、そして孝行をしたいという感情は、はたして、家族関係の変化のなかで消えてしまうのだろうか。本稿の結論を先取りすると、答えはイエスである。しかし、それは親子の間の自然な感情の消滅ではなく、むしろ、生産関係や政治関係・権力関係から解放された親子関係の出現とそれに基づいた新しい“孝行”の誕生を意味している。

表2は、東京都が行った調査の結果をもとに、父親を例に親子関係の新しいあり方を見ようとするものである。

この表で、「①子どもの興味・関心を理解しようと努力している」が83.7%と8割を越えており、父親たちはかつてのように子どもの今のありように関係なく画一的、機械的、強制的に秩序の枠にはめ込もうとはせず、今あるがままの自分の子どもを理解しようとしている。

また、「②子どもと遊ぶときは、自分も一緒に楽しんでる」の73.2%に見るように、父親たちは、子どもとの関係を上下関係ではなく、ともにある関係にしている。こうした関係は、人間関係学でいうところの「いまここで」の関係である。

生産関係でも政治関係でも権力関係でもない新しい関係である、子どもとの「いまここで」の関係を築きあげた結果、「③子どもの成長に目を見張ったり、感動することがある」という答えが88.7%と9割近くにまで達している。父親たちは、子どもとの間で自然で人間的な感情を味わっているのである。

このように、今日の日本では、親子間の自然な感情は、かつてのように社会的な枠組みが用意されたり、社会的に要請されたりはしていない。

社会の側にとっては、このことは不安定要因であり、社会の維持存続を考える立場からは、社会の混乱が危惧される。しかし、社会

そのものが変化している以上、あるいは、枠組みにとらわれぬ「いまここで」のかかわりと、その「いまここで」のかかわりがもたらす自然な感情を知ってしまった以上、人々は簡単には不自由な枠組みのなかに呼び戻されることはないだろう。

そして、こうした親子関係のもとでは、孝行もまた、もはや社会的な枠組みのなかに組み込まれることはないのではないかと。親子の自然な感情に基づく行為以外のものにはなりえなくなるのではないかと。そして体制づくり、秩序づくりの手段にはもどらなくなるのではないかと。これからの孝行は、「いまここで」の関係にある子どもが、親に対して抱く、自然な感情に基づいた行為になるのである。

おそらく、今後、「孝行」という言葉は、「優しい」「情がある」「暖かい」「思いやりのある」などの言葉と代替可能な言葉へと意味を変えていくことになるだろう。

解説キーワード

●いまここで

「いまここで here and now」は、人間関係学で用いる言葉で、「いつかどこかで there and then」の対になる言葉。

人は通常の社会生活では、役割や文脈、過去の延長のなかで生きたり、他者とかかわっている。これが「いつかどこかで」の世界である。しかし、そうした役割や文脈、過去の延長という仮面の背後で、人は生き生きとした“生”を意識下に閉じこめられようとも、“生”は、つねに豊かな感情と鮮烈な生き様を息づかせている。これが「いまここで」の世界である。

人は、社会生活を送るために、通常、「いまここで」を仮面の背後に押しやっているが、何かに熱中した瞬間や他者や物事とのありのままの出会いを果たした瞬間には、むしろ「いつかどこかで」が背後に退けられ、「いまここで」が前面に出てくる。また、社会の枠組みから自由でいられる人、自分への気づきを高めている人は、「いまここで」の世界に比較的容易に入りできる。

4 正直

静岡大学教授 馬居 政幸

●チェックポイント●

- ①学校の世界における社会的文脈では正直という徳目が第一義的な価値をもちえない。
- ②日常において正直であることを抑制された自己は、非日常の世界において表出する。

1 実感と規範

「くそ、暑いな、なんでこんな学生服、着なきゃなんないんだ……でもいっても仕方がないか……」。

これは今年の5月末の蒸し暑い日の朝、遅刻寸前で、いそいで学生服を着る中1の次男がふてくされながらつぶやいた言葉である。現代の子どもにとって「正直」という徳目をもつ意味を考えるにあたり、まず最初に脳裏に浮かんだのが、この言葉とそれを聞いた際に生じた私自身のとまどいであった。

私は制服を必ずしも否定する立場にたつわけではない。だが、私の中学生時代と同じ黒い学生服である必然性はないとも考える。制服の効用としてあげられる経済上の観点から、他に転用がきかない学生服は余分な出費になりがち。自由にすれば服装が乱れ、服装の乱れが態度の乱れという三段論法を強調する意見もあるが、学生服こそ逸脱行動のシンボルに用いられることが多いはず。まして、季節の変化に抗して、形式的に冬服用の学生服を強制することにどれほど意味があるのか疑問、といわざるをえない。

そのため、私は次男の不満を当然のことと思いながら聞いた。ではなぜとまどったのか。「いっても仕方がない」と自己規制してしまったからである。実は今年大学に入学した長

男も、中1の同時期に同じ不満をもらした。その時は、母親に向かって、答えられないのを承知で、制服を着なければならぬ理由の説明を反抗期特有の態度で迫った。私はそのやりとりに、自分の実感と相いれないルールに抗いながら、一人の人間（社会的）として自立するためのアイデンティティを求めてあがく、長男の成長を確認した。

その6年後に同じ疑問をもったのが次男。中学になって着る学生服と天候とのミスマッチに思春期特有の心のゆれと、いずれも条件は同じ。再び荒れるものと思った。だが、長男は自分の実感を“正直”に言葉と行動に顕したが、次男はそれを抑制した。

このような“正直であること”に対する態度は、次男特有のものなのか。

2 徳目と社会的文脈

徳目としてあげられる価値項目の意味は、特定の社会的文脈のなかで初めて明確になる。したがって、本稿の課題である現代の子どもにとっての正直という徳目をもつ意味を明らかにするためには、子どもたちの思考や行動様式と関連づけながら、この徳目をどのような社会的文脈（場面）のなかで用いることが可能（不可能）かを問うことが必要である。

このような観点から、次男のつぶやきを解釈するに、次のように捉えられよう。もし、

「仕方がない」という言葉の背後に、たとえ不愉快でも我慢して学生服を着ることが、中学校の期待する中学生らしさ（社会的文脈）であるとの判断があったとすれば、次男にとって中学生らしさは、“自分の実感に正直である”ことを抑制することから始まったわけである。さらに、この“自分に正直”であることを抑制する学校という場（社会的文脈）の特性は、制服あるいはその前提にある校則や生活指導のみでなく、現代の学校的世界自体に内在する傾向ではないか。

もちろん、一人の人間として自立するためには、社会の規範の学習（社会化）が必要であり、個人的実感をコントロールすること自体を避けることはできない。その意味で、大人への道を模索し始める時期にあたる中学時代に、個人的実感とは異なる規範を受容せざるを得ない場面が生ずるのは当然である。

だが、いかなる実感をどのように抑制または許容するかは、社会的歴史的に相対的なはず。加えて、抑制と許容いずれにせよ、それを正当化する倫理（価値）と論理（合理性）とともに内在化しなければ、単なる強制にすぎない。そして、通常、“正直”という徳目は、個々人の内的な感情や思考を、抑制ではなく、外的に顕現することを社会的に許容もしくは促進（「正直に告白しなさい」）する際に、意味の内実が明確になると考える。

したがって、次男の「仕方がない」という不本意な感情（倫理と論理が伴わない）を意味するつぶやきの背後には、個人的実感より集団である学校のルール優先という、社会規範の内面化に止まらない問題があると考えられる。それは、最も倫理と論理を重視すべき場であるはずの学校という社会（的文脈）における規範の内面化の過程において、正直（倫理と論理とセットになった）という徳目が第一義的な価値をもたない、という問題である。

3 学校における正直の抑制過程

校則との関連で学校を問題視する意見は多

い。校則をなくせば、子どもの自由が蘇るかの如き論調もある。だが私は、学校が旧来の“教師が教科書を教室で時間割にしたがって教える”という構造を維持するかぎり、正直という徳目が第一義的な価値になりえない心理的規制の拡大再生産が、今後も続くと考えられる。教科書に代表される事前に定められた知識の教授ならびに知識の記憶量の過多と操作時間の短さを基準とする評価が続く限り、あるいは正直と成績の正の相関が証明されない限り、学年の進行とともに正直であるかどうかは二次的な要因になる。

たとえば、小→中→高と授業を比較してほしい。先生の質問に子どもたちが自分の考えを正直に答えるのは、小学校の中学年までであることに気付くはず。逆にもし、教師が自分の考えを正直に答えなさいと質問し、子ども一人ひとりが異なる考えを正直に発表したなら、そのすべてを教師は認めるか。たまたま教師の期待する言葉を子どもが発する場合とは別として、結局は教師の用意する答えに子どもが合わせることを望むしかないはず。

道徳や特別活動、とくに生徒指導において、正直という徳目を強調することはあっても、成績評価の過程で正直であることにどれほど重きをおいているか。次男の「仕方がない」が示唆するように、子どもの成長とは、この事実を学習し、教師と学校の考えに自分を合わせるようになる過程といえまいか。これが学校的世界における社会的文脈のなかでは、正直という徳目が第一義的な価値をもちえなとした理由である。

とすれば、現代の子どもたちにとって正直は意味をもたない徳目なのか。

4 社会生活の四つの場

図は社会生活を「公-私」「日常-非日常」という二つの軸で分類したもの。子どもの場合、Iは「学校の授業」、IVは「家庭生活」、IIは「学校の儀式」、IIIは「遊びの世界」となろう。また日常性（IとIV）を反省し、正

図



しさの基準を提示するのがII、日常性から離れ、ストレスを解消し、活力や創造性の源になるのがIIIの機能と位置づけたい。

この図をもとに、これまでの論点を整理すると、公的な日常は、圧倒的に学校の世界、すなわち正直さとは別次元の価値に基づく評価が優先する場である。そこでは、自分に正直であることを抑制することを“らしさ”の基準とする規範の受容が強制される。

私的な日常はどうか。次男の不満と自己規制が、学校ではなく家庭で表現されたことが示唆するように、子どもの成長は、家庭に学校的世界が侵入する過程といえる。長男のように、学校に起因する不満を吐き出す場が家庭であったことも、家庭が学校的世界を支える場であることを逆の方向から示しているともいえる。これらのことは、公私いずれも日常的な場においては、学校的世界が支配する限り正直という徳目は大きな価値を持ちえない、ということを示唆している。

では、現代の子どもたちにとって正直であることは価値をもたないのか。否である。正直の反対が嘘であるとすれば、人は嘘をつき続けるほど強くはないはず。日常において正直であることを抑制された自己は、非日常的な世界において表出する。

5 三つのマンガの世界に

次男の愛読書(?)は6月に第一部連載が終了した『少年ジャンプ』(集英社)の『SLAMDUNK』(いのうえ たけひこ)とジャンプに代わって再び王座を伺いつつある『少年マガジン』(講談社)連載中の『シュート』(大島司)と『はじめの一步』(荒川ジョージ)。いずれも、自分の選んだ道をひたむきに(喜怒哀楽の感情をストレートに出すことも含めて)生きる高校生の姿を描いたマンガ。ただし、『SLAMDUNK』はバスケット、『シュート』はサッカー、『はじめの一步』はボクシングである。

本誌のテーマは価値観多様化だが、この三

つはそれぞれ舞台は異なるが、ストーリーを比較する限り、かなり共通の価値観のもとに展開される。確かに、キャラクターはきわめて多様である。だがそのこと自体が、多様性という価値観の共有と、仲間の世界が舞台という共通フレームの存在を示唆している。また、自分が選んだスポーツのルールにおいては、非常にストイックな世界を受け入れるが、それ以外の世界のルールには自由が原則、個々のキャラクターの個性を発揮する場として描かれることも共通。そして、何よりも共通しているのは、スポーツを選択する基準である。

- ①「頑張って 桜木君 このリハビリをやり遂げたら 待っているから—— 大好きなバスケットが 待っているから」(『SLAMDUNK』)
- ②「仕返しとか そんな小さな理由で始めたんじゃないんだ。ボクはボクシングが好きだから プロボクサーになりたいんです。」(『はじめの一步』)
- ③「トシ—— サッカー 好きか？」
「はい——」(『シュート』)

①は第一部最終回の最後の頁、背骨負傷でリハビリ中の桜木花道への心の恋人赤城春子による手紙の言葉。②はボクシングを始めた理由を幕之内一步が、それまで彼をいじめてきた同級生に言い放つ言葉。③は田仲俊彦が最も憧れ尊敬する先輩久保嘉晴の死を前にして、サッカーとの関係をふりかえるシーンに描かれた言葉。私はこの場面を、子どもの心

を表現する最も優れた表現の一つと評価するが、①②とともに、主人公がバスケ、サッカー、ボクシングをするようになった理由が明らかになるシーン。種目は異なれど、選んだ理由は共通であることが理解できよう。

国、学校、チーム、監督、正義、平和……いずれのためでもない。バスケット、サッカー、ボクシングが“好き”だという“自分の実感”に“正直に生きる”ためである。

このことについて、普遍的な理念や価値ではなく、個別的な感情にしか、自己の行為の正当性の根拠を求めないのが、現代の子どもの世界の特性、と解釈することも可能である。その意味で、価値の多様化を反映しているといえる。だが、少なくともこの場合の実感とは、単なる一時の感情の問題ではない。それですむほど、サッカーもバスケットもボクシングも甘い世界ではない。

この点と関連して、もう一つの共通点を指摘したい。それは非常に高度な技術のきわめてリアルな描写と精密な説明をストーリーの骨格においた、リアリティ溢れる構成であること。そこには、かつての『巨人の星』の大リーグボールに代表されるような世界はない。世界のトッププレイヤーが練習と研究を重ねて生み出した技術が次々と紹介され、それを実践するキャラクターは、その場ではスーパーヒーローになる。だが、バスケット、サッカー、ボクシングを離れば、授業をさぼり、女の子に憧れ、失恋をする、どこにでもいるドジな男の子。自分たちの仲間の物語であることが、もう一つの共通点である。

6 「遊」と「聖」からの逆照射

技術的にも倫理的にも完全無欠なスーパーヒーローとは、この世の人間ではなく聖なる世界の住人。それは自分たちの日常の外にある。そして高度の技術もまた子どもたちの日常の延長にはない。このような非日常性と描写・ストーリーのリアリティ（日常性）との矛盾を解決するために、『SLAMDUNK』と

『はじめの一步』が用いた手法が、実在するが神（聖）に近い世界のトッププレイヤーとその技術の精緻な模倣である。さらに『シュート』の場合は、死を介した久保嘉晴の“聖なる世界”への飛翔である。このように、現代の子どもたちが、マンガの世界とはいえ、日常性を越える世界に自己の実感の正当性を求めていることは重要である。

すなわち、まず何よりも学校世界から離れた私的な実感（好き、嫌い）にこだわるのが第一義。その意味で、図の「日常（Ⅰ・Ⅳ）」ではなく「遊（Ⅲ）」が基盤である。だがそれは、うつろいやすい感情に委ねた不安定な判断と行動ではない。自分の命を縮め（久保）、背骨を負傷（桜木）し、顔が歪む（一步）ことも覚悟して、“自分に対し正直に生きる”こと（「聖（Ⅱ）」への志向性）を優先することから生まれる選択である。

そして、いずれのキャラクターもストイックな面はもつものの、特別な人間ではなく、ドジな仲間。舞台は高校でも、読者の次男には中学生としての日常の延長線上でとらえうる存在。その意味で、マンガという非日常的な「遊び」の世界が、私的な日常の人としてのあり方のモデルになり、公的な日常の学校の規範を相対化する。

「公」と「私」いずれの「日常」でも表現できない“自分への正直さ”を求めた「非日常的」な「遊び」の世界が、「聖」なる世界を介して（倫理と論理を伴って），“正直”の価値を優先する、もう一つの“日常的な世界”を形成する“機縁”になる。このような現象（逆転）が生じていないか。

少なくとも、個々のキャラクターの差異性よりも、集団への共通帰属を優先する学校的秩序に抗して、自己の個別的で具体的な内的実感に“正直”であることを、第一義的価値とする個性が、倫理性と論理性（普遍性）を伴って、子どもたちの中に確実に育まれていることを、毎週一千万以上の読者を魅了するこの三つの作品は示唆していると考える。

5 立身出世

お茶の水女子大学助教授 耳塚 寛明

●チェックポイント●

- ①高学歴を獲得することによってビッグな夢を見ることのできた立身出世の時代は、明治期にすでに終わっている。
- ②日本の青年は、社会的成功を手に入れるために学歴が重要だと考えていない。国際的にみて日本青年の特徴は、「運やチャンス」を重視する者が多い点にある。
- ③むしろ問題視すべきは、早期から冷却された青少年のアスピレーションである。

1 日本の近代社会と立身出世

日本の近代社会は、教育を受けて俸給生活者になるという立身出世のライフスタイルが、一部の士族層からふつうの人々へと拡大・浸透する過程であった。この過程を「サムライからサラリーマンへ」という魅力的なタイトルのもとに辿ったのがキンモンス・Eなのだが、彼はすでに1900年頃に立身出世市場が閉塞化していたことに注目している（広田照幸ほか訳『立身出世の社会史』玉川大学出版部、1995年）。

高学歴者の失業、賃金水準のブルーカラー労働者への接近、さらに高学歴者を待ち受ける企業のなかでの地道な競争の登場は、立身出世イデオロギーを変容させる。ビッグな成功とあり余る富がそうそう手に入らなくなった高学歴青年のエートスとなっていたのは、業績ではなく世渡りと処世——すなわち対人関係を重視することだった。高い地位に到達することができるのは、教育ある青年のごく一部でしかない。

しかも「立身」の頂点にまで到達した少数の者も、教育を受けるために入学試験の難関を突破し、さらに「就職難」をくぐり抜け、

そして、職に就いた後にも、対人関係を手段として低い地位から一步一步前進を続ける必要があった（前掲書255頁）。高学歴を獲得することによってビッグな夢を見ることのできた時代は、近代化がはじまったばかりの明治中葉にはすでに終わっている。

2 日本は学歴偏重社会か

であるにもかかわらず、今日の日本社会は、世界に有数の学歴偏重社会であるとの社会通念が一般的である。学歴を獲得することによるさまざまなメリットは、そもそもの程度あるのだろうか。ここではまず経済的なメリットに着目してみよう。

結論からいうならば、学歴収益率は、長期的にみれば低下の一途を辿っている（竹内洋『日本のメリトクラシー』東京大学出版会、1995年、85～88頁）。1894年には帝国大学を卒業して高等官10級となった者は月給67円で、これは当時の農民や労働者の1年分以上の所得だったという（竹内前掲書86頁）。

今日ではどうか。ややデータが古いものの、渡辺行郎によれば、大学教育の私的収益率は年々低下しており、およそ6%だという（『教育経済学の展開』黎明書房、1982年）。

価値の教育の背景と現状

規範感覚が変容する背景 深谷 昌志・9

I 子どもの価値観はどうなっているのか

1 規範感覚	深谷 昌志・12
2 道徳観	滝 充・18
3 社会認識	夏秋 英房・24
4 非行観	内山 絢子・30
5 理想像	明石 要一・36
6 自己像（暗い自己像）	石川 洋子・42

II 価値の教育をめぐる疑問に答える

1 日本人の価値観はどのような系譜をたどってきたか	尾田 幸雄・50
2 公益と私益をどう調和させるか	原田 彰・54
3 価値の教育とカリキュラムはどうかかわるか	田中 統治・58
4 公教育は個人の内面にどこまでかかわれるのか	石川 侑男・62
5 教師としてどこまで価値を教えられるのか	永井 聖二・66
6 価値の教育と親権の関係をどう考えるか	荒木 徳也・70
7 修身と道徳教育はどう違うのか	飯田 稔・74
8 道徳教育の課題は何か	押谷 由夫・78
9 「徳」を教えることはできるか	高旗 正人・82

III 徳目の現代的な意味を検討する

1 儉約	石川松太郎・88
2 努力	木村 敬子・92
3 孝行	樋田大二郎・97
4 正直	馬居 政幸・101
5 立身出世	耳塚 寛明・105
6 性差（男らしさ、女らしさ）	望月 重信・109
7 友情	西本 鶏介・115
8 プライバシー	飯田 浩之・119

IV 子どもの価値観形成に与える影響

1 テレビ	島田美佐江・124
2 マンガ	井上 健・130
3 友だち	熊澤 幸子・134
4 母親	中澤 智恵・138
5 父親	深谷 野亜・142
6 学業成績	土橋 稔・148
7 教師——教師の影響：満足感の視点から	戸塚 智・152
8 部活動	亀澤 信一・158
9 高校進学	伊藤 澄生・164
10 異性	三枝 恵子・168